

*Medieval Formal Logic, Obligations, Insolubles and Consequences*  
edited by Mikko Yrjönsuuri

Kluwer Academic Publishers, 2001, pp.vii+237

渋谷克美

本書は、数人の中世論理学者による論文集である。第一部では、討論における拘束 (obligatio) に関する理論と、解決困難な命題 (insolubilia) すなわち嘘つきのパラドックスが論じられており、Mikko Yrjönsuuri, “Duties, Rules and Interpretations in Obligational Disputations”; Henrik Lagerlund & Erik J. Olsson, “Disputation and Change of Belief—Burley’s Theory of *Obligaciones* as a Theory of Belief Revision”; Christopher J. Martin, “Obligations and Liars”; Fabienne Pironet, “The Relations between Insolubles and Obligations in Medieval Disputations”の四つの論文が収録されている。第二部では推論 (consequentia) が論じられており、Peter King, “Consequence as Inference: Mediaeval Proof Theory 1300-1350”; Ivan Boh, “Consequence and Rules of Consequence in the Post-Ockham Period”; Stephen Read, “Self-Reference and Validity Revisited”の三つの論文が収録されている。そして第三部にはL. M. De Rijkによって校訂された13世紀のテキスト *Tractatus Emmeranus de Falsi Positione, Tractatus Emmeranus de Impossibili Positione* (Vivarium, Vol. XII, No. 2, 1974, pp. 94-123) の英語訳が載せられている。これらのうちで特に興味深いのは、討論における拘束 (obligatio) に関する理論と、解決困難な命題 (insolubilia) すなわち嘘つきのパラドックスに関する理論である。これら二つは、代示 (suppositio) の理論と同様に、13世紀の、いわゆる “logica moderna” において新しく発展した、中世論理学独自の分野だからである。ちなみにオッカムの『大論理学』(Summa Logicae) においても、第III部-3, 第39-45章で討論における拘束 (obligatio) に関する諸規則が取り扱われ、第46章で解決困難な命題 (insolubilia)

が取り扱われている。討論における拘束に関する理論は中世の大学における論理学の訓練から生まれ、次第に発展し体系化されていった理論である。討論者は先ず、議論を提出する者 (opponens) と、それに答える者 (respondens) に分かたれる。討論における拘束の術に関する規則とは、これらの議論を提出する者と答える者が互いに守らなければならないきまりである。オッカムの理論では、そのような規則は、意味の規定 (institutio)、承認の要求 (petitio)、真として仮定する (positio) ことと状況設定 (casus)、偽として仮定する (depositio)、真偽を疑う (dubitatio)、真であるとする (sit verum) の六種類であり、例えば真として仮定することに関する諸規則は次のものである。議論を提出する者が或る仮定を提出し、答える者がそれを承認する場合、彼は拘束の期間中、この仮定を真として維持しなければならない (仮定に関する拘束の第一規則)。更に、議論の提出者は、いくつかの命題を提示する。これらの命題に対して答える者は、仮定から帰結する命題 (propositio pertinens sequens) を真として認め、仮定に矛盾する命題を偽として否定しなければならない (第二、第三規則)。他方、仮定と論理的な関係を持たない命題 (propositio impertinens) は、仮定の拘束の外にあり、答える者は討論の状況設定 (casus) に応じて自由に、命題の真偽を答えることができる (第四規則)。Paulus Venetus, *Tractatus de Obligationibus* から、実例を取ってみよう。先ず、私があなたに、命題①「全ての人間が走る」を仮定として提示するとする。第一規則から、この命題①は、拘束の期間の間、あなたによって常に真として認められなければならない。次に、私はあなたに命題②「あなたは人間である」を提示する。この命題②は、仮定に無関係な命題である。仮定である命題①から帰結することも、命題①と矛盾することもないからである。従って、命題②は仮定の拘束の外にあり、第四規則によって、あなたは状況 (casus) に応じて、自由にこの命題②の真偽を答えることができる。無論、討論において私の問いに答えているあなたは人間であるのだから、命題②は真である。次いで私はあなたに命題③「あなたは走っていない」を提示する。この命題③は否定されなくてはならぬ。この命題は、仮定である命題①と、承認された命題②との連言と矛盾するからである。従って、第三規則によって、命題③は否定される。

こうした討論における拘束に関する理論について、Mikko Yrjönsuuri, "Duties, Rules and Interpretations in Obligational Disputations" (pp. 3-34) は、この理論が、何処に起源を持ち、中世論理学においてどのように発展したのか、という歴史的

な概観を我々に与えてくれる。Mikko Yrjönsuuriによれば、この理論はアリストテレスの二つの著作にその起源を持つ。一つは『トピカ』第8巻であり、そこでは討論において問う者と答える者の議論の仕方が述べられている。いま一つは、『分析論前書』第1巻第13章(32 a 18-20)であり、そこで述べられている「可能な事柄の仮定からは、なにひとつ不可能な事柄が帰結しない」というテーゼから、可能な事柄の仮定という発想が生まれてきた。更にアリストテレス以外の起源としては、ポエティウスの『仮言的三段論法』(De hypotheticis syllogismis)等が挙げられる。

討論における拘束の理論に関する初期のテキストとしては、13世紀最初に書かれたと推定されるテキスト① Anonymus, *Tractatus Emmeranus de Falsi Positione, Tractatus Emmeranus de Impossibili Positione* edited by L. M. De Rijk, *Vivarium*, Vol. XII, No. 2, 1974, pp. 103-123. が挙げられる(第三部に英語訳が載っている)。この理論は、1302年頃にパーレーによって書かれたテキスト② Walter Burley, *Tractatus de Obligationibus*, ed. Romulad Green, in his *An Introduction to the Logical Treatise, 'De Obligationibus'* vol. II, Louvain: Universite Catholique, 1963. において一応完成する。このパーレーによって述べられている理論が、中世論理学において標準的な、討論における拘束に関する理論と見做されており、先述のオッカムもパーレーに基づいて、彼の obligatio 論を書いている。更に Mikko Yrjönsuuri は、1302-1326年に書かれた Richard Kilvington の理論③ *Sophismata*, ed. N. Kretzmann and B. E. Kretzmann (Auctores Britannici Medii Aevi, vol. XII), Oxford, British Academy, Oxford University Press, 1990. 1330-1335年に書かれた Roger Swineshed の理論④ *Obligationes*, ed. P. V. Spade, *Archives d'histoire doctrinale et littéraire du Moyen Age* 44, 1978. をも検討しており、それらにおいてパーレーと異なった理論の発展があったことを指摘している。

更に、Christopher J. Martin, "Obligations and Liars" (pp. 63-94); Fabienne Pironet, "The Relations between Insolubles and Obligations in Medieval Disputations" (pp. 95-114) の二つの論文は、討論における拘束 (obligatio) に関する理論が、解決困難な命題すなわち、いわゆる嘘つきのパラドックスと密接な関連を持つことを主張している。Martin は、先に挙げられた討論の拘束に関する初期のテキスト① *Tractatus Emmeranus de Falsi Positione*, ed. by L. M. De Rijk, *Vivarium*, Vol. XII, No. 2, 1974, p. 104, lin. 7-15, 及び *Obligationes Parisienses* ed. by L. M. De Rijk,

*Vivarium*, Vol. XIII, No. 1, 1975, p. 36, lin. 16-32 等の中に既に、嘘つきのパラドックスについての議論が見い出されることを指摘し、彼の論文の末尾に *Obligations Parisienses* の英語訳を付け加えている。

次に Fabienne Pironet が、討論における拘束に関する理論に基づき、パラドックスの解決の例として Guillaume Heytesbury (1313 以前-1372/3) による解決法を提示しており、テキストも彼女自身によって校訂され、出版されている *Guillaume Heytesbury, Sophismata asinina. Une introduction aux disputes médiévales.* (Collection Sic et Non), Paris, Vrin, 1994. 嘘つきのパラドックスは、次のようにして生ずる。ソクラテスは「ソクラテスは偽を言う」とだけ発言し、それ以外の命題を述べないとする。この場合、偽であると言われているのは、「ソクラテスは偽を言う」という命題全体であり、従って「ソクラテスは偽を言う」という命題は自らへと立ち返る自己言及を引き起こしている。こうした状況設定 (casus) を前提として、次のパラドックスが導出される。

- a) 1. もしソクラテスが言っていることが真であるならば、(仮定)
- 2. ソクラテスが言っているのは「ソクラテスは偽を言う」という命題の他にはないのであるから、(状況設定)
- 3. (ソクラテスは偽を言う) は真である。(1, 2)
- 4. ゆえに、ソクラテスは偽を言っている。(P が真である  $\supset$  P)
- b) 1. もしソクラテスが言っていることが偽であるならば、(仮定)
- .....
- 4. ゆえに、ソクラテスは真を言っている。

従って、もしソクラテスが真を言っているとすれば、偽を言っていることになり、もしソクラテスが偽を言っているとすれば、真を言っていることになり、かくして悪循環に陥る。このパラドックスに対する一つの解決法は、「ソクラテスは偽を言う」のように、パラドックスを生じさせる命題を無意味であると拒否する 'cassantes' 達の解答である。いま一つは、〈命題 P の部分である「真」あるいは「偽」という語は、命題全体 P を代示することができない〉というように、「真」や「偽」の語の代示を制限し、自己言及文を排除しようとする 'restringentes' (制限する人々) の解答である。オッカムも『大論理学』(Summa Logicae) の中で、この見解を支持している<sup>1)</sup>。

これに対して Heytesbury は、討論における拘束の理論も嘘つきのパラドックスも

共通に、① 或る状況 (casus) を設定し、② 命題の語の意味を規定すること (institutio) に基づいて成立するものであることに着目し、討論における拘束に関する理論によって、嘘つきのパラドックスを解決しようとする。すなわち、嘘つきのパラドックスは、① ソクラテスは「ソクラテスは偽を言う」とだけ発言し、それ以外の命題を述べないという状況設定において、② 語が通常の意味表示を行ない、「偽」が「ソクラテスは偽を言う」と言う命題全体を言及する場合に生ずる。しかし、Heytesburyによれば、〈状況設定は不可能なこと、すなわち矛盾を含まない限りにおいてのみ認められるべきである〉という討論における拘束に関する規則によって、状況設定①は拒否される。状況設定①は、同一の命題が同時に真であり、且つ偽であることを含意するからである。

以上、紹介した論文はいずれも論点が明快であり、中世論理学を研究する者に極めて大きな示唆を与えてくれる。更に本書と同様に、討論における拘束に関する理論について論じているものとしては、Hajo Keffer, *De Obligationibus*, Rekonstruktion einer spätmittelalterlichen Disputationstheorie, Brill, 2001 が挙げられる。

## 注

- 1) 拙著『オッカム「大論理学」註解 V』付録、嘘つきのパラドックスとオッカム、創文社、2003 を参照。

---

Jean-Michel FONTANIER

*La Beauté selon Saint Augustin*

Presses Universitaires de Rennes, 1998, pp.200

樋 笠 勝 士

アウグスティヌス哲学の研究において「美」を主題とする研究は思いの外多い。古くは Svoboda の著作があり、最近では Harrison があつた。このような研究の視座